

漢法苞徳塾資料	No. 204
区分	論説・医学史
タイトル	東洋医学史の諸問題
著者	八木素萌
作成日	1992.12 (入門講座)

◎馬堆漢墓出土の医書と、それ以前の諸書に見られる医学の記述前 1122 年—医師制度の始まり—『周礼・天官冢宰』に疾医・癰医・食医・獸医等に分けられたと記載、『左伝』『公羊伝』『韓非子』『山海經』『淮南子』ほかに、種々の医薬や治療や疾病の記述や医論などの記述が見られる。

前 400 年頃、鉄製用具類が広く不及するのに伴って金属鍼が砭石に取り変わった。

(範文瀾『中国通史簡編』・第一編第四章) および (郭霽春『中国医史年表』より)。

馬堆漢墓は、前 500 年頃の物と見られており、大量の医書が出土した、発見発掘は 1973 年である、字体を見ると、篆書が崩れて筆記体の隸書に成り始めた頃のものようである。足臂十一脈灸経・陰陽十一脈灸経甲本・陰陽十一脈灸経乙本・脈法・陰陽脈死候・五十二病方・却穀食気・導引図・養生方・雜療方・胎産書・十問・合陰陽・雜禁方・天下至道談などの医書である。

◎黄帝内經の成立年代の頃

「戦国秦漢時期先后出現的『黄帝内經』『神農本草經』『難經』和張仲景的『傷寒雜病論』等」

(「武威漢代医簡」文物出版社、中医研究院医史文献研究室「武威漢代医藥簡牘在医学史上的重要意義」より) つまり、戦国・秦・漢の時期にこれらの典籍が成立したのである。当時の社会的状況および思想状況を概観しておこう。

『中国思想』『中国哲学』ともに宇野哲人の著、「…堯舜を祖述し、文武を憲章し、古来の教えを集めて大成したので、其の教学は天下後世に大なる影響を及ぼして、永く支那民族を支配するに至った。多くの支那学者が、孔子を祖とする儒教を以て、支那の正統の思想とするのは、当然のことである。やや孔子に後れて出で、儒教の礼楽尊重を攻撃し、儉質節用を主張する所の墨子は、大禹を宗とし、無為自然を尊び、知慧技巧を排斥する老莊学派は、更に遡って黄帝を宗とするというように、各学派は夫れ夫れ其の宗とする所を標榜して居るが、これは支那民族の尚古思想の現われである。…」(『中国哲学』20～21 ページ) と記述されていることから理解できるように、『黄帝』の名を冠されている書を理解する為には老莊の思想を知る必要があるのである。

また、「…漢初の時代は、…(秦代の虐政に堪えかねて反乱が起こり、戦乱にもなった、こうして漢の高祖による天下統一になったので) …非常に困難を堪え忍び、殆ど疲れ果てた後であるから、何を差措いても先ず休息しなければならぬので、黄老の無為自然説が、非常に歓迎されたのは当然のことと思う。…」(上書 52 ページ)、

「…かくの如く黄老の思想が、漢初に流行した理由は、…第一には…騒乱に疲れた人心に慰安を与

えたことであるが、第二には…建国の祖其の人の人格が、黄老の無為を喜んだこと。…第三の原因は、戦国の末期に在りては、…儒教は殆ど天下の思想界を三分して其の二を保つ勢力があったが、…秦が天下を統一すると、主として儒教に対して非常な圧迫を加え、書を焼き儒を坑にしたので、儒教は経典と人物と共に失って、一時非常に衰微して居たということ。第四の原因は、儒教は、所謂の礼楽の政を主張するので、黄老の無為自然と違って、煩鎖な制度文物を説く。…こういう学説が、忽卒休息を思ふの際に容れられないのは勿論であろう。…」(上書53～54ページ)「…漢代黄老学の代表者は淮南子であるが…」(上書55ページ)と第一期を記述し、続いて前に述べている「…前漢後漢を通じて約四百年間の思想界は、之を五期に分けることが出来る。…」を承けて、第二期、第三期、第四期についても記述している。

それによると、第二期は武帝の時代で政権の安定に見合って、前期の反動のように儒教が重んぜられるが、儒教を学ぶことが利禄の捷徑と把握されたので、「…一旦試験の及第して、名利を得れば、儒教の精神などは全く忘れて仕舞うので、儒教は一時盛大を極めたけれども、恰も根の無い花のようなものであった。…」(上書57ページ)、第三期は前漢の末、哀帝平帝の時代で、讖緯の説(讖は未来記のこと、緯は〈受命の符〉の論で、ともに幽奇に墮す偏りを振んでいる)が主となり、第四期には仏教が普及して行く思想的状況であり、第五期は後漢の末、桓帝靈帝の時代で、「…然し此の党錮によって節義の士が殺されてから、苟も性命を乱世に全うせんことを務むることとなり、士風一変するに至った。」ものである。等のように思想状況を概観して後「之を要するに漢代思想界は、儒・道・法術の思想が迭に消長して居るけれども、漢末に至っては儒教は衰微して、老荘学が盛大となるべき勢を示して居る。」(上書64ページ)と結論している。

こういう事情を考えれば、『黄帝内経』『神農本草経』『黄帝八十一難経』『傷寒雑病論』など、漢法医学の基礎を打ち樹てた『典籍』が成立したと目されている漢代の思想状況は、極めて濃厚に、これらの『典籍』にその蔭を落しているのが、理解されるのである。

◎重要な医学書の成立と関連する事項

◇郭霽春『中国医史年表』より

前480年頃	東周・戦国	『黄帝内経』の基本的な古い部分が成立したと見られる。
前213	秦	始皇帝の焚書
1	漢	『神農本草経』
108	東漢	華佗生まれる
150	東漢	張機(仲景)生まれる
180	東漢	王叔和生まれる
190	東漢	『難経』成書(多紀元胤『医籍考』巻7「医経」)
208	東漢	華佗・没
210	東漢	『傷寒雑病論』成書
211	東漢	張機(仲景)・没

239	三国（魏）	呉・呂博『難経』注
242	晋	王叔和『脈経』成書
256	晋	皇甫謐『甲乙経』成書
300 年前後頃		葛洪『肘后百一方』・『抱朴子』
479	齐	全元起『黄帝素問一注』成書
500	齐	葛洪『肘后百一方』（肘后备急方）日本に輸入された
502	齐	陶弘景『神農本草経集注』成書
514	梁	鍼灸が朝鮮に伝わる
550	梁	灸治療が日本に伝わる
552	梁	『鍼経』が欽明天皇に贈呈される（藤井尚久「医学文化年表」）
562	梁	『明堂図』他160巻日本に入る（藤井尚久「医学文化年表」）
607	隋	小野妹子中国に派遣され、以来医学薬学が伝入されるようになる（藤井尚久「医学文化年表」）
607	隋	恵日等中国に医学留学（藤井尚久「医学文化年表」）
610	隋	巢元方『諸病源候論』成書
623	唐	僧恵齊・恵光中国に留学、恵日・福因など留学より帰国す
626	唐	楊玄操『黄帝八十一難経注』（『医籍考』）成書
650 頃	唐	『備急千金要方』できる
654	唐	印度より玄奘帰国した（有名な孫悟空の～（『旧唐書』）
668	唐	楊上善『黄帝内経太素』成書
680		『千金翼方』（孫思邈～）成書
752	唐	王焘『外台秘要』成書
752	唐	鑑真和尚来日し医学を講義
757	唐	『黄帝内経太素』日本に伝入
762	唐	王冰『黄帝内経素問～次注』成書
934	日本	『医心方』丹波康頼・成書、『外台秘要』に類似していると批評されている
1056	宋	高保衡・林億の『黄帝内経素問』校正
1574		曲直瀬道三『啓抽集』成る
1575	明	李梴『医学入門』成る

◎中国思想において『黄帝』の名を冠されている事の意味

◎陰陽五行論の完成～白虎観会議と『白虎通』

淮南子が老荘思想の当時の代表者であること、また、彼は陰陽五行論が確立される上で、趨行と並んで大きな役割があったものであること、『黄帝内経』『神農本草経』『黄帝八十一難経』『傷寒雑病論』などに一貫して「陰陽五行論」が運用されているのが見られること。従って、これらの医学的経典を研究する場合、漢代の思想状況を承知した上での研究態度が、不可欠である点を理解しなければならないことは明らかな事であろう。(BC79年の事件)

陰陽論と五行論は、別々に発達した世界認識であるが、統合されて一つの論理体系になったものであることは、周知のことである。

五行論の定立・基本的な完成が、「白虎観会議」によるものであることは、その内容を記録し論じた『白虎通』(班固)〈別に「白虎通徳論」と言われるが、こちらが正式名である〉に明らかである。

陰陽論は『易』に説かれ、その研究・展開を通じて発達したので、これを研究する事が重要であり、五行論は別個に発展したが「白虎観会議」において諸儒が当時の異同を検討し整理したとされている、『五行大義』が残されていて「中村璋八の詳細な研究」は見事なものである。陰陽論も五行論も、いずれも処世論と政治論の側面が強調されて見られているが、五行論の内容には世界に対する認識論が展開されているので、この認識論・生命論・人生論の側面が医学に適用されたのであろう、この側面が重要なものであると言えよう。

この「世界観」「認識論」としての側面は、研究方法論として我々を導くものであるが、この面を極めて要領よくまとめたものが、張介賓の『類経図翼』の「第一巻」「第二巻」と『類経附翼』の「一卷」「二巻」と言うことが出来よう。

「黄帝」の名が冠されている医学書は「陰陽五行論」で記述されているという特徴があるとは、中国古代医学を研究している人々の意識している所である。

◎成立年代が近接している『難経』と『傷寒論』

◎『素問』『靈枢』『難経』『傷寒論』に記述されている医学書

『内経』

「五色」「脈変」「揆度」「奇恒」「陰陽」「九鍼」「鍼経」「熱論」「上経」「下経」「従容」「形法」「脈経」「脈法」「脈要」「本病」「陰陽十二官相使」「金匱」「太始天元冊文」「大要」「刺法」、以上の21種類の他に、単に「経曰」「論曰」と言うように表現されていたものが在る、略称と思われるものであるが、書名そのものは不明。

『難経』

「十变」「六十首」

『傷寒雑病論』

「陰陽大論」「九卷」「胎臚薬録」「并平脈辨證」

〈「古今録驗」「近効方」「肘後」「外台」「千金」「千金方」「千金翼」

……附方として、傷寒雜病論を撰次した王叔和や校正した林億などが附方の出典を示している分である〉

◎唐・宗・金・元等の時代から明代の入り口

医学上の重要な時期は、

1. 春秋戦国の秦代以前の時期—思想的には諸家が輩出したことから判かるように後代の百家争鳴の時のように殷・周時代の宗教的抑制から自由な時期—に準備されていたものが秦代にまとめられた、秦代は始黄帝の焚書・坑儒から医学書は除外されていたが、虐政で思想学術には冬の時代であったので、才能があり政治的勢力の中枢から阻害された者は、政治や経済の利害に関わらないで済む分野として医についた。
2. 漢代・後漢代には秦代の虐政の為に不毛であった時期の反動のように、秘かに承継がれていたものや達成されていたものや、が整理されたと言って良いだろう、『神農本草経』『黄帝八十一難経』『傷寒雜病論』が成書されている。
3. これに続くものは、『脈経』(AD 242)・『甲乙経』(AD 256)に達成であろう。ここには、次に行なわれている所の、枢要な古典(三墳とも呼ばれる)からの、新たなる展開の萌芽、とも言うべきものが見られる。
4. この後には『諸病源候論』(AD 610)・『千金方』(AD 650)・『外台秘要』(AD 752)・『素問・王冰注』(AD 762)・『銅人腧穴鍼灸図経』(AD 1026)・『和剂局方』(AD 1107)・『小兒葉証直訣』(AD 1107)・『注解・傷寒論〈成無己〉』(AD 1144)・『婦人大全良法』(AD 1237)・『類証活人書〈朱肱〉』(AD 1107)・『十四経發揮』(AD 1341)と言うように続いて行く。
5. 金元四大家それぞれの代表作と知られている著書は、『宣明論方〈劉完素〉』(AD 1172)・『儒門事親〈張從正〉』(AD 1221)・『内外傷辨惑論〈李東垣〉』(AD 1247)・『格致余論〈朱丹溪〉』(AD 1347)などである。

◎温病論の成立と完成は結核とマラリアの克服であった事

葉天士『外感温熱篇』(通称は「感熱篇」であり、『温熱経緯』中に全文が掲載されている)。「張仲景は医界の孔子、葉天士は医界の孟子」と「世の称賛をうけ」た旨を、『中国漢方の歴史』(張明澄)は書いている。

温病学を学ぼうとする時には、何はさておいても研究しなければならないのは、『温熱経緯』(王孟英)と『温病条辨』(呉鞠通)の二書である。「…理論面では『温熱経緯』実践面では『温病条辨』といわれ…この両書を熟読すれば、温病治療における理論と実践が全部完成されるとされている。…」(張明澄・「中国漢方の歴史」)。私は『温病正宗』(王徳宣・中医古籍出版社)は、以上に追加して是非とも研究しなければならないものであると考えている。

『中国漢方の歴史』（張明澄）は『中国の近代』（市古宙三）から人口の推移の表を引用しながら「…1741年から1851年のあいだに、人口は約一億四千万から約四億三千万になっており、110年のあいだに三倍になっており、…唯一の解釈は、医学の飛躍的な発展にもとめられるべきではなからうか。…温病理論完成以前と以後の治療効果のひらきをよく知っていることだろう。…」と論じている。

結核については『医学衷中参西録』以後のことであると張明澄は論じている、然しながら「虚勞」や「虚熱」に関する治療は、温病学によって「六淫・四傷」概念と「三焦」「衛・気・榮・血」理論が、『傷寒論』の病を「六経」において把握する治療学を大きく補足して、新しい段階に医学が引き上げられた。その内容から、明らかな治効の改善が見受けられるので、張明澄の断定は適切とは言えない。張明澄はいみじくも指摘している、「…八綱理論によると、すべての病気は、〈表熱実証・第1タイプ〉〈表熱虚証・第2タイプ〉〈表寒実証・第3タイプ〉〈表寒虚証・第4タイプ〉〈裏熱実証・第5タイプ〉〈裏熱虚証・第6タイプ〉〈裏寒実証・第7タイプ〉〈裏寒虚証・第8タイプ〉に分けられ、いままでの〔傷寒論〕からの医学では、第1・第2・第7タイプは、なかなか治癒できなかった…温病理論の完成により、第1・第2タイプの病気が容易に治癒できるようになった。…」と記述している、また、温病学が成立する前、明代のなる前と明代初期の医学的達成は「…この時代になると、陰陽哲学いがいの論理がもちこまれ、医学的現実に合致するような論理（三焦・六淫・四傷など）が導入され、そのために治療成績が飛躍的に向上したのである。…」として、『…「李東垣の温補派」…（温補派とは元氣促進派）…「朱丹溪の滋陰派」…（滋陰派とは榮養補給派）…』とも記述している。

◎瘀血論と燥湿論と痰火論などの重要な医学書

- ・瘀血論…『血証論』（唐宗海）
- ・燥湿論…『医理』（余国佩）
- ・痰火論…『紅炉点雪』（龔虚中）
- ・燥湿論…『医原』（石寿棠）
- ・伏暑論…『医学要是』（呉達）

◎その他の重要な医学書

- ・喉科…『喉科指掌』（張宗良）・『重楼玉鑰』（鄭梅澗）
- ・婦人科…『婦人良方大全』（陳自明）
- ・乳幼児…『小兒藥証直訣』（錢乙）
- ・眼科…『審視瑤函』（伝仁宇）

◎現代中医学の準備期としての清末から中華民国から新中国まで

秦伯未『中医入門』と銭楽天ほか『中医捷徑』とが、現代中医学成立を準備されている段階の中国の伝統的医学の水準を示し代表したものである。私は『中医入門』（秦伯未）の方が良いと思っている。国家事業としての重要古典の「校注、訳釈」シリーズは、今日の研究水準の精華として重要なものである。このような達成が、実用書の中にも教科書にも、十分に活用されることを希望する。

◎承淡安と経絡治療、中医学的鍼灸における承淡安

中医学的鍼灸における承淡安は「元老」的な老中医師である。今尚健在なら90歳前後の筈である。第2次世界大戦（太平洋戦争）終了後、創草期の経絡治療と密接な接触を持ったことは良く知られており、中国の戦後の比較的早い時期における鍼灸医学の再建・復興に大きな役割を持っていたようである。「傷寒」の「鍼灸治療」や「温病」の「鍼灸治療」の研究と臨床に意欲的に取り組んだ足跡を反映した著書がある。

◎現在の中医鍼灸への注文

1. 証と治則は湯液のものと同じであるが、治則に基づいて、何経を用いるか？何穴を用いるか？が決められなければならない訳である。所が、経脈学説の記述や穴の性質および治効についての記述との、論理的なつながりの問題になると、ボヤケタものになっている。つまり、湯液の場合には、証→治則→薬性薬味論→処方論→修治→薬方論→処方→薬方→投薬となっていて理論的に一貫した関連を持っている。しかし、鍼灸の場合には、湯液のような精密な論理的関連で構築されていない。
2. 研究成果と臨床との間に見られる落差が、かなり大きいと言わざるをえない。重要古典の校注や語釈、臨床例の蓄積と検討、穴の性質が組み合わせによって変化する側面（対穴・不射方など）の研究、歌訣からの用穴例の分類整理、手技手法の面の集積と分類の仕事など、多くの仕事が達成されている。しかし、このような達成が、臨床に一般化されているとは言えない。また、実用の為の整理と思われる発表には学問的態度から見て、恣意的な採択や訓詁不足や原典籍の誤解ではないかと感じられるものが見受けられるなど、水準の不良と言わざるを得ないものも見られる。具体的な臨床面では粗雑に見られるものが多い。
3. 選穴配穴に見られる問題点は、既に検討した事項と密接である。触れ足りなかった部分は、「循経取穴」による臨床が過半数であるのが実情である、と報告されている。しかし、「循経取穴」の理論と方法は、一部が入っているが不明瞭である。様々な配穴原理があるのであるが、まだ、それらは体系的に整理され構築されていない、運用の拠所を明らかにする必要にも答えられていない。
4. 手技手法の生理的作用や手技の持つ治効作用の問題は、既に論じた部分は越えていない。いま一つの重要な面としては、「伝統派」と「学院派」の暗然とした争いがあり、教育や制度的行政

的な面の側にある学院派が有利な立場であることは明らかであることなどの消息がもたらされている。「得気」「鍼響」「具体的な臨床取穴」などについての把握と、手技手法に対する臨床的態度と、これらにおいては両派の間の相違は大きいものようである。どうも、「伝統派」の臨床的力量を、理論家が支援する事の方が、成果がより大きくなりそうである。

◎未来医学としてのパラダイムのための課題

～略

以上